

教員の資質能力を育てるための教職実践演習と教育実習指導

明星大学教育学部教育学科 客員教授 樋口 忍

4年次科目に教育実習と教職実践演習がある。教職実践演習は教職課程で今まで学んだ教員としての資質能力が有機的に統合され、形成されたかを最終的に確認する科目である。これは、実際に教育現場で求められている教員の資質能力を検証し、より効果的に授業を行うための提案を含めた実践報告である。教職実践演習の一方、教育実習（教育実習指導）は今まで学んだ教職関係の資質を実際に教育現場で実践する教科である。教員として求められる資質を学生が実習という形で学び身に付ける目的がある。しかし、短期間の実習では教員として必要な資質を身につけることは困難である。そこで、教職実践演習と教育実習の有機的な結びつきを考え、より効果的に教員としての資質や能力を学び、身につけることができると考えた。

1 教員として求められている資質能力と教職実践演習

教員は近年教育基本法の改正をはじめ、学校教育法、教育職員免許法等の改正や学習指導要領の改訂など、教育関係法令の改正に対応した取り組みや、地域との連携、保護者への対応など、学校教育の複雑化・高度化する課題に組織的に対応できる力が求められている。身に付けるべく基本的な力として「学習指導力」「生活指導力」「外部との連携・折衝力」「学校運営力・組織貢献力」がある。

具体的にいうならば、

- (1) 学校の教育力向上のために、確かな学力の定着、規範意識の醸成、キャリア教育の推進、道德教育の推進など、それぞれのねらいに即した教育内容の充実と教育指導力が求められている。

学習指導力では

- ・授業を構想する力
- ・ねらいに沿って学習を進める力
- ・児童生徒の興味を引き出し、個に応じた指導をする力
- ・主体的、対話的で深い学びを推進する力
- ・学習状況を適切に評価し、授業を進める力

生活指導力・進路指導力では

- ・児童生徒との良好な関係を構築する力
- ・児童生徒の思いを理解し、適切に指導する力
- ・児童生徒の個性や能力の伸長ならびに健全な心身及び社会性の育成を通して自己実現を図らせる力
- ・自校の生活指導、進路指導上の課題を発見し解決する力

- (2) 今日的な課題の対応。多様化、複雑化する児童生徒の問題、保護者からの要望苦情への対応など、日常的に起きる問題を適切に解決する力。学校の教育方針や教育内容を積極的に保護者や地域社会に発信し、課題解決のための理解と協力を得る力。

外部との連携・折衝力

- ・保護者・地域・外部に適切に対応する力
- ・課題に応じ保護者・地域・外部機関との連携をとり解決に向けて取り組む力

- ・保護者・地域・外部との協働の下、自校の教育の向上を図る力
 - ・学校からの情報発信や広報、保護者・地域・外部機関からの情報収集を適切に行う力
- 学校運営力・組織貢献力

- ・校務において企画・立案する力
- ・上司や同僚とのコミュニケーションをとりながら、円滑に校務を遂行する力
- ・組織の一員として校務に積極的に参画する力 ・校務の問題点を把握し改善する力

が具体的に自治体が求めている教員の資質能力である。(参考：東京都初任者研修テキスト)

教員として仕事をしていくためにはこれらの資質能力を必要とされている。教員としての資質能力を大学で学生に身につけるためには、理論を学習し、知識を身に付け、体験を通して身に付けることが理想である。そのまとめとなる教科(講座)が教職実践演習である。

そこで、授業内容を実際に求められている教員の資質能力を付けるためにどのようなことを行っていけばよいかを考えた。

① 公務員としての教員

教員の立場や仕事を法律に結び付けて理解する。

服務規律……服務の根本基準、服務の宣誓、職務上の義務、身分上の義務、その他の制限や規制

教育法規を中心にすえ、教員とはどのように法律で守られ、どのような制約や義務があるかを確認したい。

② 教育課題

現在の学校における教育課題を考え、解決方法や原因を考え追及していく中で自分なりの解決方法や子供理解につなげていく。

学校の教育課題……人権教育の推進、道徳教育、特別支援教育、安全教育、食育、環境教育、体力向上、理数教育の充実、国際理解教育、学校教育と部活動、小中一貫教育、言語活動の充実、児童虐待の発見と対応、SNSに関わる課題と対応、その他

学校における実際の課題を認識し、その課題を解決する方法や手段を議論し、教師ととして取り組まなければならないことを認識し課題解決の意欲を持つことが重要である。

③ 学習指導

子どもたちが何を学び、何を獲得していけばよいかを追求し、そのための授業方法形態を学び実践につなげることが大切である。

授業力と授業改善……授業づくり、学習指導案の作成にあたって、授業研究の実際授業の評価、授業規律 主体的、対話的で深い学びの授業づくり、その他

授業づくりを中心に、子どもたちに何なんのために何を学ぶのかを明確にした授業をめざしていけるように授業研究を行う。また、客観的に授業を評価し授業改善を行える力をつける。

④ 生指導力・進路指導力

生活指導・進路指導の意義を学び、具体的事項を研究し、実践の場で何が大切かを学ぶことである。

生活指導……不登校への対応、いじめの予防と解決法、問題行動への対応、自殺予防、教育相談、喫煙、飲酒、薬物乱用防止、その他

進路指導……進路相談、キャリア教育、その他

生活指導・進路指導とは何かを考えさせつかませ、具体的な指導法を今までの既習事項と結び付け、自分なりに指導方法を考えることが大切である。

⑤ 外部との連携・折衝力

学校はすべて学校内(児童生徒、教職員)で成り立っている訳ではなく学校外との関係も重要な要素である。保護者地域との連携協力は学校教育を円滑にそして効果的に推し進める力となるものである。地域保護者との良好な関係とはどのように作っていくかを具体的に学ぶ必要がある。

外部との連携……保護者とのよりよい関係、地域社会との関係構築、関係機関との連携、具体的に外部の方との接し方(好感を与える話し方、電話対応)

外部との関係の大切さ学び、どのようにしたら良好な関係が築けるかを考え実践する。

⑥ 学校運営力・組織貢献力

学校は組織体であり、組織で子供たちの教育や問題解決に取り組まなければならない。学校組織を学び自分が組織人としてどのように行動、貢献すればよいかを学ぶことが大切である。

学校運営力・組織貢献力……学校組織・分掌と教員の役割、学級・学校の生活づくり文書事務、その他

教員としての役割を知り、それが組織としてどのように組み込まれているか体系的に理解させる。その中の役割がどのような貢献ができているかを検証し組織として学校教育に取り組んで行くことの大切さを理解させる。また、実際の文書事務についてもどのようなものがあるかを体験させておきたい。

⑦その他

各都道府県で自己啓発・人材育成を行っている。教員になればすぐに自分の目標や課題について問われる。教員としてどのような方針考えを持って実践していくかを問われる。したがって、本人の教育観や人間性、指導観について自分なりに考えを持っていなければならない。教職実践演習において身に付けなければならないことは現場に必要な資質能力である。その中の基本となる資質として、教師となる心構えや教育的愛情、教育観を身に付けておく必要がある。教員となって問われることはもちろん教師となるものの根本的な思想であり、これを確立しておくことは教師となるものとして当然なことである。

教職実践演習では基礎力として教育的な愛情をもたせ、自己の教育観を学ばせ、まとめさせることが重要である。例としては保護者会を例にとり具体的に教育観や指導観(方法)を発表させることなど、教師としての考え姿勢を問うことで教育観等を確立させるようにしていく。以下に実際の教職実践演習授業で行っていることを述べる。

2 教職実践演習の目的と実際

文科省によれば教職実践演習は、教職課程の他の授業科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて、学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、確認するもので、いわば全学年を通じた「学びの軌跡の集大成」として位置付けられるものである。また、学生は将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、教職生活をより円滑にスタートできるようになることである。

教科の実際は、教員として求められる4つの事項(使命感や責任感、教育的愛情に関する事項、社会性や対人関係能力に関する事項、幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項、教科・保育内容等の指導力に関する事項)についてロールプレー、事例研究、模擬授業、指導案作成、学級経営案作成、フィールドワーク、校外学習計画立案、安全指導の具体例等、実際に教育現場で起こっていることや行われていることを

中心にそれらを題材として演習を行っている。

内容は、事例研究では過去に起こった事件や事故を取り上げ、そのことについて教員としてどのようにしたらよいかを討議してまとめる。そして模擬授業を行う。模擬授業は教育実習時で行った研究授業をもとに実際に行う。このとき指導案を作り受講者全員で模擬授業および指導案の評価検討を行う。教員となって最初の仕事は学級の子供たちを担任としてまた教科担任としてどのように育てていくかをイメージし計画をたて、学級をどのように経営していくかを示す必要がある。学級経営案を作成させ実際の現場での教師の役割や自分の教育理念を確認し実践するための計画案である。校外学習計画立案、多摩動物公園と昭和記念公園を校外学習の目的地として出発地は実際の学校からという設定で実際に实地踏査からはじめ具体的な計画を立案させ、模擬職員会議で提案をさせる。現場の教員が考えなければならないこと配慮することを踏まえて校外学習の計画を立案することによって校外学習とは何かを学ぶ。その中には教員としての根本的な考え方、教育的な愛情、校外学習で児童生徒が身に付けてほしいこと、組織人としての常識や考え、保護者の考えや配慮してほしいことなども含まれる。安全指導の具体例としては安全マップの作成を行う。大学のキャンパスを学校と地域に見立て安全教育を中心にすえて教員としてやるべきこと児童生徒中心の安全指導の考え方などを学ぶ。このように授業では現場に即した具体的に演習を行っているが、教員として求められる4つの事項が身につけているか身に付けられたかと考えたとき、経験や学んだこととの繋がりが不足しているために、ただ課題をこなして答えを出しているだけではないかと感じる。まだ、学びの集大成とはいいいがたい状況である。

それは、教職実践演習の目的である「学びの軌跡の集大成」言い換えるならば全学年を通した教職に関する教科の内容を有機的に結びつけ教員としての最小限の資質能力の形成することであるが、現状では学生が学び経験したことがそれぞれ独立した知識経験で、それらが有機的に結合していないため、教職実践演習で教員としての資質能力を身につけることの効果的な学びになっていない。これを効果的な学びにするために工夫が必要である。

3 教育実習(教育実習指導)のより効果的な指導内容

教育実習関係教科は教育実習に赴き実習を通して、具体的に教育現場での指導方法や学校という組織体の理解、子どもたち実態把握と関係づくり、事務作業等を情報として知り実践して学び獲得するための教科である。しかし、実際に行われているのは学生の教育実習へ行く不安を解消するため、教育実習を円滑に行うための準備を整えることが主に行っていることである。具体的には指導案作成、模擬授業の実施などが中心である。

教育実習は5月から実習が始まり、ばらばらと履修者が教育実習に行くといった状況である。学生の要望もありどうしても授業関係のことを中心に行っている。他のことや大切なことを伝えたくても全員が教育実習に行く前に時間が取れない。これは、実習に行きそこで学んでくることが目的な教科であるから仕方ないことである。

しかし、教職実践演習はいろいろな学習や演習を通して、教員としての資質能力を付け、教員としての姿勢を確認する教科である。その目的を達成するためには今まで学んできたことを有機的に結び付けてこそ学習効果が上がり目的を達成できるものである。先に、現場で教師に必要な資質能力については述べたが、教育実習は数少ない現場での実践が行え、また体験や情報がダイレクトに学べる機会である。今まで知識や技能を現場で有機的に結び付け実習という経験を通して、より教師としての資質能力を身に付けていかねばならない。効果的に学ぶために学校現場についてさまざまな角度から知っておくことが重要である。そのためには、教育実習指導の授業で、教育現場のことを深く知りどのような観点で実習を行うか、何を課題として実習に臨むかを確立させねばならない。ただ実習をこなすだけでなく、教育実習での学習の見方を変える必要がある。見方を変えるためには疑問や興味を持たなければならない。見方の視点を変

えることによって、大切な情報や体験して得られるものが違ってくる。そのようにしないと、深く知り、考え、自分のとらえ方、考え方の確立につながらない。教師としての考えや必要な行動、仕事としてやらなければならないことを自己の中で確立することは難しい。教育実習指導の時間において効果的に実習を体験し、今まで学習してきたことを有機的に結び付け、教師としての資質能力を身に着けるよう授業を行っていく必要がある。

授業の中で学校の組織と役割、授業づくりを中心に授業を行っていた。学習指導の授業づくりも授業案を作り模擬授業をするだけでなく、その授業にさらなる課題を課して授業を作らせる。例えば、①学習状況の悪い子供たちが多いクラスの授業、全体に力があり授業を理解している子供が多いクラス、いじめや不登校のあるクラスなど、授業の目的を達成するために意識したり、クリアしなければならない課題を与え、指導案を作らせ模擬授業をおこなわせる。②学校と教育法規、その他の法律との関係調査③教育課題の解決策(討論)④場面指導(生活指導場面)⑤保護者対応(ロールプレイ)⑥学習指導要録⑦出席簿記入などを取り入れ、今まで学んだこととの結び付けを意識して授業を行う。

これらを取り入れることにより教育実習時に学校を見る視点が違って深く学ぶことができ、より効果的な実習が行われるのではないだろうか。教職実践演習授業においても教育実習の現場経験が生き、より具体的実践的に考えることができ、今まで学んだことがより有機的にはたらし、教師としての資質能力を少しでも多く身に付けることができると考えた。

4 教員採用試験との関係

このところの教員採用試験の傾向として、教員としての資質能力を図る方法として、場面指導や具体的な指導方法や現場に即した行動や言動が試されている。面接重視で人柄や教員としての考え方、知識が総合的に問われている。採用試験が行われるのは4年生の夏である。3年生までに試験で問われることをそれぞれが体験し、自分としての考えを確立しておくことは大切なことである。現状として4年生になってから慌てて準備をしていることが多い。大学で教員採用試験に向かって多くの講座を開いているが全員受講するわけではない。多くの学生に3年生の間に自分の考えの確立や資質能力の向上をはかって貰いたい。そこで、教育実習指導の時間に教員採用試験も意識して、先に述べたようなことを多く取り入れていくことが教員採用試験の準備につながるのではないだろうか。

5 最後に

教員としての資質能力を育てることは本学部の目標であり、学生の望みでもある。これはひとつの実践の考え方として述べてきたが絶えず学生をどのように育てていくかを考え、実践教科はその時の学生の状況や、必要とされる教員の資質能力を見据えた形で工夫改善していくことが必要である。